

押上・とうきょうスカイツリー駅周辺エリアの歩み



勝川春潮画「押上村行楽」



電化当初の浅草(現とうきょうスカイツリー)駅
(大正13年)



引き込み線もある大規模な工場だった
日立コンクリート(株)押上工場

交通の結節点から、産業の拠点へ発展

東京都墨田区の中央に位置する押上・とうきょうスカイツリー駅エリアは、歴史とともにその町並みを変えてきました。江戸時代には庶民が集まる行楽地として栄えましたが、明治に入ると市街地化が始まります。

明治35年(1902年)には東武鉄道 北千住～吾妻橋(とうきょうスカイツリー)間が開通し、さらに浅草停車場や、鉄道と北十間川の舟運を結ぶ船渠(ドック)なども整備され、貨物や旅客が行き交うようになりました。また、大正時代には京成鉄道押上線、東京市電も通るようになり、都心部でも有数の交通結節点として発展。その後、関東大震災や戦争を経て復興の歩みが始まる昭和20年代、このエリアには日本初の生コンクリート工場が登場します。広大な敷地には2社の工場が操業し、東武線貨物で運ばれてきたセメントと原材料によって製造された生コンクリートは、ここから各地へ輸送されました。押上・とうきょうスカイツリー駅エリアは、こうして日本の高度成長を支えるとともに、産業の拠点として発展したのです。

押上・とうきょうスカイツリー駅周辺地区における機構の取り組みについてはHPをご覧ください。

<http://www.ur-net.go.jp/toshisaisei/urbanr/oshinari.html>